

38,000石を減封された。10月8日、支藩である萩野山中藩より11歳の大久保岩丸を名を忠良と改め、75,000石の新藩主に迎えた。1871年（明治4）、廃藩置県により名実共に藩政の機能を失った小田原藩は、280年の藩政の歴史に終止符をうち、明治の新政に入ってしまったのである。

6 近代のあゆみ ―明治・大正・昭和―

日本の近代は明治維新から始まる。ここでは明治維新から小田原に市制が施行される昭和15年（1940年）までの約70年間の歴史をたどってみよう。小田原は、江戸時代には有数の譜代藩として、また、東海道の主要な宿場町として栄えていたが、明治維新によって廃藩置県、宿場制度の廃止という大変革に直面した。近代日本の歩みは政治・経済・社会・文化のすべてにわたる偉大な進展の歩みであったが、町勢は衰え、昔日の面影もなくなった小田原の歩みはどうであったろうか。何に活路を見い出し、町勢の回復に努めていったのだろうか。また、明治から大正にかけて小田原はしばしば災害に見舞われているが、どのように立ち直っていったのだろうか。このように、小田原の近代は一面では苦難な歴史であったが、他面、このような中でも、町政のしくみを整え、学校教育を充実させ、産業、文化を発展させるなど、近代化が力強く進められていった。これから70年間の歴史を振り返って、近代小田原の苦悩と発展の跡をたどってみよう。

1 苦難な明治の小田原

城は無用の長物 藩主大久保忠良は1870年（明治3）、次のような願書を新政府に提出している。

「当藩の城は秋以来のたびたびの暴風雨で大破してしまい、修理しようにも藩にはその力がありません。しかし、いまの時勢を考えると、城は無用の長物になってしまいましたので、修理しても無駄であると思います。そこで、取払って廃城にしたいと思いますので、お伺い申し上げます」

新政府の許可はすぐに下りて、その年の末には天守やその他の櫓やぐらが高梨町（浜町）の平井清八郎に払い下げられ、直ちに取り壊されてしまった。翌年の正月の本丸には天守台が寂しく残っているだけであった。数百年にわたって武家政治の象徴として厳然とそそり立ち、無言の圧力を加えて来た天守は、無用の長物として破壊されてしまったのである。時代の大きな転換期であった。



建物が解体される直前の小田原城

廃藩置県と小田原 はいはんちけん 新政府ができたばかりの時は各地に江戸時代そのままの藩があり、領主がそれを支配していた。そこで、1869年（明治2）新政府の中心勢力であった薩長土肥の四藩が率先して版籍奉還はんせきほうかんをし、他藩も自発的にそれにならわせたのである。小田原藩においても、藩主を引き継いだばかりの忠良が大勢に遅れまいと版籍奉還を願い出ている。さらに、新政府は各藩の行政長官として新たに知藩事を設け、忠良などの旧藩主をこれに任命すると、次々に命令を発し、藩政の改革をさせていった。またさらに、新政府は統制力を強くするために、藩主と領民を切り離し、藩を廃止することによって、藩兵を解散させ、全国の年貢を政府自身が徴収しようとした。1871年（明治4）7月に行われた廃藩置県がこれである。小田原藩においては、これによって忠良は知藩事をやめて華族となり、住居も東京に移った。

1686年（貞享3）忠朝の時、再度小田原の領主となってから185年間続いた大久保氏の支配はここに終わりを告げたのである。

廃藩置県によって小田原藩は小田原県と名称を変えた。地域は藩の時と同じである。県としては狭いようだが、当時は全国が3府302県に分けられており、現在の神奈川県^{にらやま}の範囲にも神奈川県、六浦県^{むつうら}、荻野山中県^{おぎのやまなか}と、この小田原県の4県もあったのである。忠良なきあとの県政は大参事がやっていたが、それもわずか4か月で終わりとなってしまった。同年11月には小田原県に荻野山中県と伊豆を加え、足柄県と名称を変えた。この時、全国は3府72県に整理されている。足柄県庁は旧藩時代の政庁であった小田原城二の丸に置かれ、新しい行政官として、参事に元韭山県（静岡県）参事の柏木忠俊、権参事に元伊万里県（佐賀県）小参事の杉本芳照の両名を迎えた。旧藩主の大久保氏は、この両名を迎えるに当たって士族庶民一同に御直書を布告している。その中で、朝廷の言い付けをよく守り、柏木、杉本の両名と対立することのないようにと、こまごまと諭している。

1876年（明治9）に政府はまたも行政区域の整理を行った。これによって足柄県は廃止され、伊豆が静岡県に入ったほかは、すべて神奈川県に編入された。小田原には神奈川県小田原支庁が置かれ、ここに廃藩置県以来の目まぐるしい行政区域の移り変わりは終わるのである。

地方自治の芽ばえ 町政も目まぐるしく変わっていった。江戸時代に城下町は侍屋敷と町屋^{まちや}に分かれ、町屋はさらに一九か町に分かれていたが、足柄県になるとすぐに士族町を3区、町屋を3区の合計6区に区分けされた。この区制は、1871年（明治4）に制定された戸籍法を実施するための区域として全国一斉に設けられたものであるが、その後、大区、小区を設け、行政の単位になっていった。1875年（明治8）には従来の19か町を十字・幸・万年・新玉・緑の5か町としたが、小田原の総称としては、宿駅制度の名残りで「小田原駅」という呼び名が町制が施行されるまで使われていた。翌年神奈川県に編入された小田原は、神奈川県第二21大区1小区となった。この区において行政事務を行ったのは、県から任

命された戸長、副戸長である。戸長、副戸長は初め県庁へ出勤していたが、その後、役場を持つようになり、1876年（明治9）に幸町（本町）大久保貫一郎に小田原で初めての役場が設けられた。

地方制度が整えられてくるのは、1878年（明治11）にいわゆる三新法（郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則）が公布されてからである。これによって、県会議員の選挙が行われて、県の仕組みが整えられ、また、行政単位としての郡が作られて、郡会も開かれた。そのため、神奈川県小田原支庁に代って、足柄下郡役所が置かれた。さらに、大小区が廃止され、小田原は5か町にそれぞれ戸長が任命された。しかし、5か町連合の仕組みをとったため、実質的には1か町として行政が行われていた。三新法が公布された翌年、町村会の仕組みを定めた町村会規則が制定された。小田原でも議員選挙（定員40名）が行われ、5か町連合町会が開かれた。選挙権は地租を納める満20才以上の男子、被選挙権は同じく25才以上の男子に与えられた。この町会の権限は非常に限られており、住民の意志を反映するものとは言えなかったが、選挙された住民の代表による町会が開かれたということは、地方自治の発達の上に大きな意義があった。その頃はちょうど自由民権運動が一番盛んな時に当たり、町会が開かれた翌年、十字町（南町）の士族の松本福昌外13名を総代として、神奈川県下9郡559町村の23,555名の人々が、元老院に国会開設の請願書を提出している。

町政は、その後、大きな変化もなく進められていったが、政府は、憲法の調査研究と併せて、本格的な地方制度の研究を行っていった。この研究は、板橋に古稀庵を営んだ山県有朋を中心に進められ、1888年（明治21）に市制、町村制として公布された。これによって、5か町連合町は名実共に小田原町となり、町政は公民（2年以上住み、地租あるいは2円以上の直接国税を納め、1戸を構える男子）の代表によって行われるようになったのである。1889年（明治22）には新たに町会議員の選挙（定員24名）が行われ、さらに、当選した議員によって初代町長として今井徳左衛門が選出された。小田原町の自治は、このようにして進展していったのである。

灯が消えたような小田原 大久保忠良が東京に移住するため、小田原を去る時の様子が「明治小田原町誌」に、次のように記されている。

「大久保従五位殿（忠良）が東京にご出発になられるので、町年寄を始め各町役人及び有志の者が酒匂川までお見送りした。時勢の移り変わりは止めることはできないが、先君が藩主になられて初めて小田原にお入りになった時の行列の盛装を思い浮べ、ひそかに涙を流した者もあったことだろう」

まさに時代の流れを強く感ずる一場面である。すべてが時代の転換点に立たされていた。特に、士族たちの生活の苦悩は深く、侍屋敷の小路に「貧乏小路」という汚名が付けられるほどであった。1883年（明治16）の士族の実情として、次のような統計がある。

士族の戸数1,104戸の内

かなり生計を維持する者・・・32戸

ようやく生計を立てているが、段々と生きる道を失いつつある者・・・989戸

いままさに飢餓に陥ろうとする者・・・83戸

いかに士族の生活がぎりぎりのところまで来ていたかがよくわかる。俸禄をうち切られ、その代り与えられた一時金や公債は借金の返済や抵当のために失うし、また、いろいろな商売を始めても、「士族の商法」といわれて失敗してしまった。多くの士族が内職をしたり、家財道具を売ったりして、その日暮しをしていたのである。

一般庶民の家々も大変であった。小田原宿は他の宿と異なり、田畑がほとんどなく、城下町として、また、宿場町として生計を維持し、発展してきたのである。しかし、明治維新によってすべてが一変してしまった。それでも、足柄県庁があった頃までは多少の旅客があったが、その後はほとんどなく、旅館は全く経営困難になった。料理屋に転業したものも多かったが、それもはかばかしくなかった。

このような打ち沈んだ状態は人口の動きにも現われている。

1872年（明治5） 13,306人

1876年（明治9） 13,314人

1878年（明治11） 13,574人

1882年（明治15） 14,091人

特に、1872年から76年までの4年間には8人の増加しか見られず、大量の流出があったことがわかる。小田原での生活に困窮し、東京に出た者、親類縁者を頼って他の地方に行った者などさまざまであろう。士族、平民共に苦難な時代であった。

沈滞^{ちんたい}からの脱出 1887年（明治20）、東海道線国府津駅が開設された。当時の東海道線は国府津から今の御殿場線を通して沼津に抜けており、小田原は幹線から外れてしまった。しかし、沈滞期にあった小田原にとっては、この国府津駅の開設は大きな刺激となった。早くも翌年、京浜方面からの客をあてこんで、小田原の海岸近くに旅館と料亭を兼ねた鷗盟館^{おうめい}が有志によって建設され、続いて国府津から湯本までの馬車鉄道が敷設された。「国府津おるれば馬車ありて」と鉄道唱歌に歌われた馬車鉄道は、雨天に泥がはねるといって沿道の家々の苦情もあったようだが、年間25万人（明治28年）もの乗客を運び、順調に発展していき、1900年（明治33）には、馬車に代って電車が走るようになった。これは小田原電気鉄道と呼ばれ、日本で2番目に早くできた電車として知られている。



人車鉄道 芥川竜之介の小説「トロッコ」に鉄道建設の風景が描かれている。

このような中で熱海方面への来遊客が増え、1896年（明治29）には小田原、熱海を結ぶ人車鉄道が開通した。これは客を乗せた箱車を人夫が押していくという、かなり風変わりな交通機関であったが、湯河原、熱海の温泉へ行くには一番便利だった。小説家の国木田独歩もよく利用したらしく、彼の随筆に人車鉄道のことを記している。しかし、1906年（明治39）には、この人車鉄道に代って蒸気機関車が引っぱる軽便鉄道が登場した。これは志賀直哉が小説「真鶴」で描いているように「煙突の上に丸いオーブンでも乗せたような」「小さい軌道列車が大粒の火の粉を散らしながら息せき」切って走っていたが、人車鉄道よりもだいぶ便利になったと言われて、京浜方面からの湯治客に喜ばれたのである。

こうして小田原は、箱根や熱海方面への玄関口という有利な位置にあったため、交通機関の順調な発達に恵まれ、維新以来の打ち沈んだ町勢は次第に回復に向っていった。このような情勢を反映して、交通機関が整備される明治30年以降、人口も急速に伸び、1911年（明治44）には、ついに、20000人台に達している。小田原はいよいよ発展期の大正時代を迎えるのである。

2 教育の発展

藩校より小学校へ 戊辰箱根戦争によって、大きな痛手を受けた小田原藩は、時流に取り残されないようにするため、藩校集成館の改革を行った。

1869年（明治2）には、英学科を新たに作り、さらに、1871年（明治4）には、国学科を加え、一般庶民の入学を認めた。これらはすべて新政府の方針、当時の思想界の動きを敏感に取り入れたものである。1872年（明治5）4月、政府の命令により、集成館は50年の歴史を閉じて廃校となったが、引き続いて、小田原駅には「共同学校」（中学）と、「日新館」（小学）の2校が開校した。この2校は、足柄県権令柏木忠俊の尽力と、旧藩主や、士・民有志の寄付によってできたのである。

次いで、8月、新政府によって学制が頒布された。国民教育の目標が示され、各地に小学校ができていった。日新館は、翌年4月より公立小学校となり、共同学校は、のちに教員養成のための講習所となった。小田原の公立小学校は日新館のほかに、啓蒙館、壺

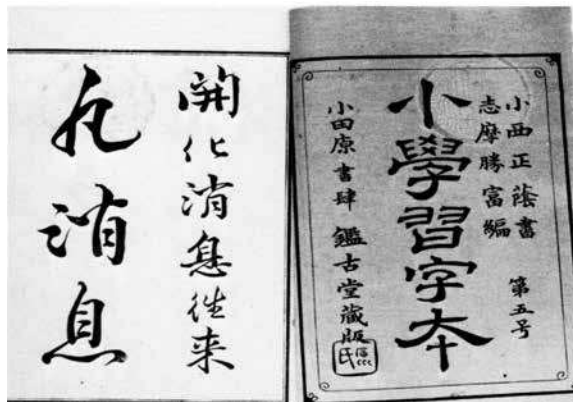
ちよう だ さい か 丁田学校、西海子学校が相次いで開校した。なお、現在の小田原市内に学制頒布直後に創立された小学校は、別表のとおり15校であった。これらの学校は一部を除いて、ほとんど寺院を借りて校舎にあて、教員もまたほとんど旧小田原藩士で、教室では羽織、袴の先生が、鞭をもって掛図を指し、生徒が一人ずつ立ってこれを唱え、それが終って全生徒が唱和するというような授業風景であったらしい。当時の就学率は資料が欠けているので明らかではないが、小田原では1874年（明治7）には、39%と推定されており、全国平均32%に比して、相当高かったようである。以後、これらの学校はいくたびかの統廃合をくりかえして現在に引き継がれてきたのである。

(明治5~6年)

所在地	校名	現校名	校舎	設立年月
小田原駅	第一大学区第二十八区 第一番小学 日新館	三の丸小 新玉小	集成館 新玉本源寺 万年宝安寺 池上眼藏寺 中久野東泉院 飯田岡福田寺 矢作春光院 曾我原東光院 不明 前川常念寺 山王原弘經寺 酒匂長楽寺 板橋香林寺 早川久翁寺 不明	明六・四 明六・四 六・八 六・五 六・ 五・八 六・ 六・五 六・五 六・五 六・五 六・五 六・五 六・五 六・五
同	第十二番小学 啓蒙館	同	同	同
同	第十六番小学 竜町田学校	同	同	同
足柄村	第二十三番小学 成美館	足柄小	同	同
久野村	同第一支校 第二十五番小学 久野学校	久野小	同	同
達正寺村	同第一支校 第二十八番小学 飯田岡学校	富水小	同	同
矢作村	第三十一番小学 九思館	千代小 下曾我小	同	同
曾我原村	同第一支校 第三十五番小学 曾我原学校	同	同	同
永塚村	同第二支校 第三十六番小学 永塚学校	同	同	同
前川村	第四十六番小学 崇広館	前羽小	同	同
山王原村	同第一支校 第三十九番小学 山王学校	山王小	同	同
酒匂村	同第二支校 第四十二番小学 酒匂学校	酒匂小	同	同
板橋村	第五十一番小学 有禎館	大窪小	同	同
早川村	同支校 第五十七番小学 早川学校	早川小	同	同
根府川村	同支校 第五十八番小学 根府川学校	片浦小	同	同

※小田原駅

小田原の総称として、宿駅制度の名残りで、「小田原駅」という呼び名が町制が施行されるまで使われていた。



小田原で出版された習字の教科書



明治初期の卒業証書

中等学校の設立 1872年（明治5）4月、小田原に中学校が開校した。名称は「共同学校」、所在地は十字四4丁目（南町）にあった旧藩主、大久保家の私邸であった。福沢諭吉の慶応義塾に学んだ小野太一郎その他が教員となり、主としてアメリカの教科書を使っていたようである。しかし、共同学校は開校以来、生徒数が少ない上に経費がかさむので、ついに1874年（明治7）廃止されて、教員養成のための師範学校（はじめは師範講習所といった）となった。

この小田原師範学校内に、1876年（明治9）に至って、また中学校が併設されている。これは、共同学校廃止後、中学校再興の機運が高まったためであろう。しかし、この小田原師範学校は1879年（明治12）には、横浜師範学校に合併吸収されてしまった。そして、これに代って同年、郡立小田原中学校が設立され、生徒数77

名をもって開校された。しかし、これも1885年（明治19）に廃校になってしまった。郡立小田原中学校が廃止されて、2か月後に小田原英語学校が設立されたのであるが、これも経営に窮して1年を待たずに翌年廃校となった。小田原英語学校の廃校によって、中学校は小田原から姿を消してしまったのである。しかし、この頃、向学の意気盛んな民間人が、私費を投じて私立英和学校というのを開設した。将来は郡立中学校とする目的であったが、維持していくのが困難となり、目的を達せず1890年（明治23）に廃校となった。

このように設立されても廃校の運命をたどることになったのは、ひとつには資金不足による経営の困難性があげられる。そのため小田原有識者の中学校再興運動は、自力建設よりもむしろ県立の中等教育機関の小田原への誘致運動に熱意と努力が傾けられていった。

この間、師範学校誘致の運動もおこったが、結局鎌倉に建設された。しかし、熱心な運動がついに報いられ、待望久しい県立中学校が1901年（明治34）4月、神奈川県立第二中学校（神奈川県立小田原高等学校）として小田原英語学校廃止以来、14年ぶりに誕生したのである。



県立第二中学校の設立（現在の小田原高等学校）

ひろがる女子教育 明治初期、小田原の小学校の特色の1つに女子の就学率の高さがあげられる。1874年（明治7）、全国男女別就学率は、男子45%、女子19.6%であるが、小田原では、推定男子42%、女子36%であり、また、同年、小田原の3校に在学している生徒の男女別比率をみると男子54%、女子46%となっている。この数字は、女子の教育熱の高さをはっきりと示している。女子の教育の広まりは、江戸時代からの伝統に基づくもので、幕末にすでに私塾に25名、寺子屋に140名の入学があったことが記録されている。

やがて、女子の中等教育への関心が高まり、幸町の高等小田原小学校に、1903年（明治36）より、「女子補習科」が設けられ、続いて5年後の1908年（明治41）に、町立小田原高等女学校（神奈川県立小田原城内高等学校）ができた。これより6年前の1902年（明治35）に新名百刀によって裁縫伝習所がつくられ、やがて、新名裁縫女学校（旭丘高等学校）となった。これは報徳精神に基づいて良妻賢母を育成するというものであった。

大正以後の教育 大正時代の教育は、明治時代の精神と方向を受けつぎ、日本の国際的地位の高まりとともに、著しい発展を示すようになった。そして、職業教育の必要から実業学校を作る動きがおこってきた。そのため、小田原の隣村、足柄村にも1921年（大正10）村立の足柄実科高等女学校（現在の神奈川県立小田原東高等学校）ができ、さらに1927（昭和2）、夜間の実業学校として小田原商業学校（現在の神奈川県立小田原東高等学校）が、向学心に燃える働く人たちのために作られた。

昭和の初めは不景気の世の中で、国民の生活は不安定であった。やがて、満州事変、日華事変がおこり、国をあげて戦争への道を歩みはじめ、教育もまた国家主義をもとにした教育方針が打ち出され、次第に軍国主義の方向へと導かれていった。1941年（昭和16）、尋常高等小学校が解消され、国民学校令が公布されて、初等科6年、高等科2年の国民学校となった。

3 近代文学と小田原

小田原は一地方都市でありながら近代文学史上に名を残す人々を生んでいる。それは江戸時代から文学愛好の伝統があり、さらに気候風景に優れたこの町に往来した多くの文士の影響もあったからであろう。

保養地小田原 明治、大正期の小田原が保養地としてクローズ・アップされたのは風景、気候もよく箱根の温泉にも近いということが大きな要因になっている。1887年（明治20）7月に東海道線が国府津まで開通し翌年には国府津・小田原・湯本間に小田原馬車鉄道が営業を開始した。交通が便利になるとともに、酒匂の松濤園や、鷗盟館などの旅館が建設されて京浜方面からの客の誘致に活気ある活動を展開した。1890年（明治23）10月、小田原海岸（本町）に伊藤博文が滄浪閣という別荘を建てた。この頃の伊藤は貴族院議長の席にあり、小田原滞在中は名士の往来も多かった。1894年（明治27）伊藤は民法起草のために滄浪閣を提供した。1900年（明治33）、旧小田原城内に皇室の御用邸を建設する案が進み、1月地鎮祭を行なって工事に着手し、翌年1月に竣工した。この御用邸には明治天皇の皇女、常宮、周宮がしばしば滞在され、また大正天皇も皇太子時代よく利用された。しかし、1923年（大正12）9月1日の関東大地震でつぶれ、22年間の小田原御用邸としての存在は終わった。1907年（明治40）には山縣有朋が板橋に古稀庵を建て、1922年（大正11）84歳で没するまでここに住んでいた。この間、山縣は国家の元老として大きな力をもっていたので、来訪する名士が後を絶たなかったといわれる。板橋の丘陵は気候・風景も佳く古稀庵の周辺には閑院宮別邸をはじめ実業家、政治家などの別荘が次々と建てられた。現在、南町で公開・活用が行われている田中光顕が建てた別邸（現在の小田原文学館）や、黒田長成が建てた別荘「清閑亭」は、そのような建物が現在も残されている例である。

文士の往来 一方、小田原の風光を愛した文学者たちが小田原に移り住むことも次第に多くなり明治後半期から大正の前半期がその頂点になった。詩人北原白秋が小田原に来たのは1918年（大正

7) で、初めは十字町御花畑（南町）に住んでいたが、間もなく天神山の伝肇寺の境内に移り「木兎の家」を建てた。

白秋の小田原生活は8年間であるが、ここで彼は後世に多くの業績を残したばかりでなく、小田原地方にも大きな影響をあたえた。小田原時代の商品として「雀の生活」「水墨集」の詩集、「とんぼの眼玉」「まごあぐす」などの童謡集があり、

その他散文集、民謡集等、その作歌は2,000余首にのぼるといわれる。雑誌では鈴木三重吉らと「赤い鳥」を創刊(1918年)し、山田耕作と「詩と音楽」を創刊(1922年)、その他、短歌雑誌等も出している。北原白秋の小田原における記念碑は天神山伝肇寺の境内と同時に小田原文学館敷地内に建てられ、有名な「赤い鳥小鳥」の童謡が刻まれている。このほか小田原に来往した作家には明治時代に、村井弦斎・斎藤緑雨・小杉天外などがあり、大正時代に入っては、谷崎潤一郎・加藤一夫などがいる。



小田原文学館にある
北原白秋の「赤い鳥小鳥」童謡碑

(足柄上郡誌・足柄下郡史より)

小田原出身作家の活躍 (1)北村透谷 小田原出身の近代作家といえ、まず北村透谷をあげなければならない。透谷は明治初期の文学界で指導的な役割を演じ、詩や評論の世界に華々しく活躍した天才的文学者であった。その生涯は極めて短かったが、その作品は明治文学の指針となった。以下透谷の文学的系譜をひも解いてみよう。

1868年(明治元)彼は父北村快蔵、母ゆきの長男として唐人町(浜町)に生まれた。本名は門太郎である。1881年(明治14)家族とともに東京へ移住したため、小田原の小学校から京橋の泰明小学校へ転入学した。当時は自由民権運動が最も盛んな時で

あり、透谷にも影響を与えていた。

泰明小学校卒業後、透谷は自由民権運動への政治熱を高め、政客たちとの親交を深めていったが、やがて政治に行き詰まると、政治熱も低下していった。1883年（明治16）東京専門学校（早稲田大学）に入学、政治から離れた彼は文学に自己を生かす道を求めた。1889年（明治22）透谷20歳の年「楚囚之詩」を自費出版した。これが世に出た彼の最初の作品である。1892年（明治25）には文壇に乗り出す機会を得て全力を文学に打ち込もうと決意した。評論「厭世詩家と女性」を女学雑誌に掲載し、女学雑誌からは毎月執筆を依頼された。島崎藤村を知るのもこの年である。さらにこの年は「国民之友」などに多くの作品を発表し、飛躍の時代を迎える。透谷23歳の年であった。1893年（明治26）女学雑誌から分かれた文芸雑誌「文学界」が創刊された。透谷はこの創刊号に同人として随筆「富嶽の詩神を思ふ」を発表し世評はおおいに高まった。続いて「内部生命論」も論評として文学界に発表されている。この年8月末、国府津在前川村（小田原市）長泉寺の一室へ転居した。ここで「眠れる蝶」、「双蝶のわかれ」などの詩を発表したが、経済的窮乏、精神的疲労、創作力の衰えを自覚してあせりを感じはじめた。10月には藤村が突然長泉寺に透谷を訪ねている。



北村透谷記念碑

この間の事情は藤村の小説「春」に詳しい。12月長泉寺から東京の父母の実家へ戻ったが精神的な苦悩は一層高まり、もはや進んで筆もとれないほどであった。その後、精神状態はますます悪化し1894年（明治27）5月、芝公園内の自宅の庭で縊死をとげた。満25歳であった。

透谷の小田原生活は12歳までで、その後東京生活へ移ったが1891年（明治24）小田原地方出身学生の団体である函東会^{かんとう}に入会、その機関誌「函東会報告誌」に小論文を発表したり役員になったり、東京例会にも出席したりして、少年時代の郷土とのつながりを保っている。しかし、1893年（明治26）には役員も辞し東京の例会にも出席することはなかった。現在彼の生家近くには「北村透谷生誕之地」の碑が建てられ、また小田原文学館には北村透谷記念碑が建てられている。碑文の筆者は島崎藤村である。

(2)牧野信一 牧野信一は1896年（明治29）小田原に生まれ、1936年（昭和11）小田原で没した作家である。彼の文学活動は、同人雑誌「十三人」に載せた「爪」が藤村に認められ「新小説」に紹介されたことから始まる。これが文壇に出るきっかけとなったのである。彼の作品には虚構^{きょこう}（想像によって現実の物語のように仕組むこと）と事実を織りまぜて、自らの生活の身边を描写したものが多く、いわゆる私小説作家であった。

彼は緑1丁目（栄町）に父久雄、母エイの長男として生まれた。父渡米後、母エイの勤務する尋常小田原小学校へ入学、その後神奈川県立第二中学校（小田原高）へ、続いて1914年（大正3）早稲田大学へ進学した。卒業後時事新報社の記者となった。藤村の紹介で「新小説」に「凸面鏡」を掲載、評論家の批評の対象となったのは1920年（大正9）信一が25歳の時である。初めて小説の依頼を受けたのは「新潮」からで、1923年（大正12）「熱海へ」を発表、当時、文壇に最も影響力があったといわれる同誌の「創作合評会」^{がっぴょう}で取り上げられた作家として、文壇に認められることになった。やがて「中央公論」、「文藝春秋」等の有力誌に「村のストア派」、「ゼーロン」等多くの作品を発表した。しかし、1932年（昭和7）頃になると神経衰弱が始まり生活も苦しくなった。やがて彼の苦悶^{くもん}の時代が始まるのである。その後、「文藝春秋」に「鬼涙村」を発表、世評は高かったがその作風は次第に暗

い現実味を帯びはじめていった。1936年（昭和11）神経衰弱がこうじて单身小田原へ帰った。新潮に掲載された「風流旅行」は彼が生前発表した最後の小説であった。病勢は悪化し寝たり起きたりの状態であったが、同年3月24日、新玉2丁目（浜町）の実弟宅で縊死した。41歳であった。

菩提寺は寺町の清光寺であり、故人の20回忌の墓前祭が1956年（昭和31）に行われた際、新たに伊藤喜朔題字、久保田万太郎碑文の「牧野信一之墓」が建立された。

(3)福田正夫 大正期の詩壇に「民衆詩派」の詩人たちの活躍があるが、福田正夫はその中の一人として同人誌「民衆」を発刊し名声を高めた小田原の詩人である。「民衆詩派」は人間の生活力を愛情をこめて歌おうと努め、現実のあらゆる素材を詩の世界に取り入れ平明な自由詩を作った。

福田正夫は1893年（明治26）十字4丁目（南町）の医師、堀川好才の五男として生まれ、後に新玉4丁目（栄町）の女学校や幼稚園を経営していた福田方に身を寄せ、養子となった。1908年（明治41）に神奈川師範学校（横浜国大）へ入学した。この頃より文学に興味を持ちはじめ師範学校を卒業後、根府川小学校に赴任した。その後、川崎の玉川小学校へ赴任、詩人白鳥省吾、富田碎花の勧めで詩集「農民の言葉」を初めて自費出版した。

1916年（大正5）片浦村石橋分教場に赴任し、1921年（大正10）までの5年間、教鞭をとるかたわら青年会にも関係して夜学に尊徳夜話、透谷選集等を講義したり、幼稚園を作ったりするなど、村の指導に努めた。1918年（大正7）小田原在住の詩人たちと雑誌「民衆」を創刊し、「民衆詩派」の名を起こした。当時、小田原在住の北原白秋と交遊、



「民衆」創刊号

この間、「トラウベル詩集」、「未墾地」を出版した。

1921年（大正10）3月には前後8年間の教員生活と別れ教壇を去った。翌年には白秋と詩作についての論争が4か月にわたり行われている。その後、次々と作品を発表して名声を高め人気を博した。1927年（昭和2）、28年には「福田正夫詩集」（1集15集）を出している。

しかし、やがて創作活動は低調となり、震災後は東京世田谷へ移住した。1951年（昭和26）脳出血の発作をおこし、翌1952年6月帰らぬ人となった。59歳であった。1か月後、遺骨は小田原へ帰り早川の久翁寺の祖先の墓地に埋葬された。

なお1966年（昭和41）の15回忌には、遺族によって「福田正夫詩碑」が境内に建立された。また、城山公園にも井上康文詩碑と並んで福田正夫の「民衆碑」が建設されている。これは1959年（昭和34）に城内に建てられたものを、1989年（平成元）に現在地に移設したものである。

4 近代産業のめばえ

名産のあれこれ 小田原特有の産物は、訪れる人々の格好の土産として評判になり、商品の販路も広がり、製造方法も新しい技術が取り入れられるようになった。

(1)箱根細工の発展 明治以後、箱根細工は、全国の需要に応ずるため生産が増大していった。原材料も箱根山で満たすことができなくなり、広く各地に求めるようになった。そこで、生産の中心地は、箱根から次第に交通の便利な、板橋・十字（南町）へと移っていった。大正期に入ると、谷津・荻窪の山ろく地帯へ、昭和になると、栄町・浜町・中町・井細田から、さらに、小八幡・国府津・堀之内と、市内各地で盛んに製造されるようになった。

製造方法は、むかしの「手ばり」や「足ぶみろくろ」に代わって電動力を使い、数十人の職人が分業で仕事を進めるようになった。

製品の種類には余り変化は見られないが、挽物では、おぼん、茶たくなど、指物では、寄木細工・玩具が多く作られるようになった。

(2)ものさし 酒匂の竹ものさし製造は江戸時代の後期から行われていたらしいが、明治に入っても、はじめは製造人の制限などがあって、業者の数は少なかった。明治29年に、「度量衡検定所」が設

箱根細工生産地の広がり



けられ、翌年には法律が制定されて、製造人の人数制限が解かれたため、製造業者も次第に増えていった。工場の規模も家内工業的なものから新しい器具・機械などの設備をもつ、工場生産に発展していった。こうして「竹ものさし」は小田原の特産品として全国に知られるようになり、産額も明治末期には全国産額の4分の1を占めるようになった。以後、大正・昭和にわたり、全国一の生産量を維持して来た。

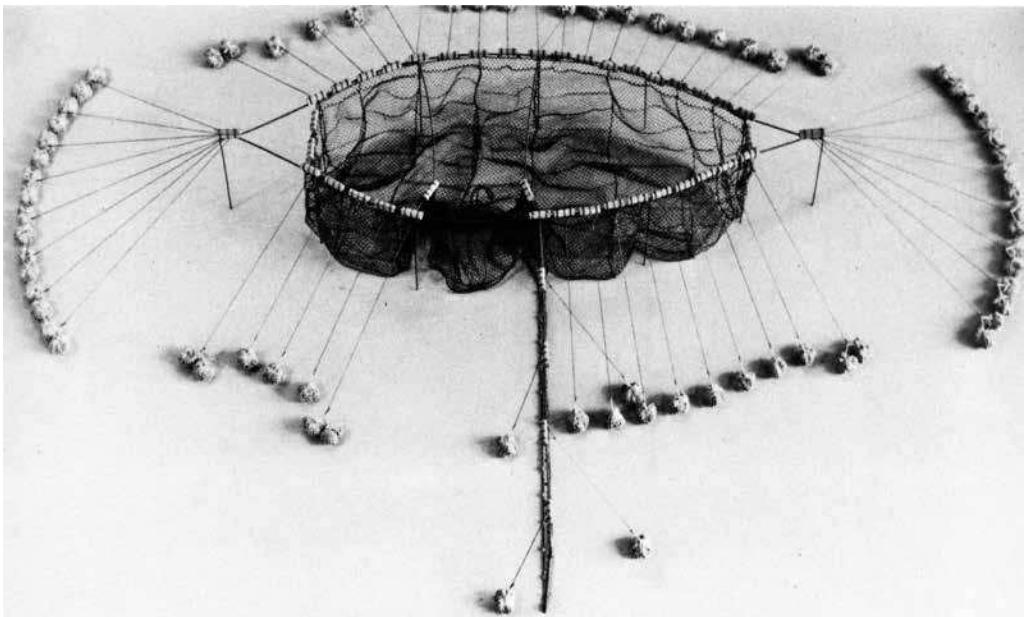
しかし、材料の良質の竹が不足してきたことや、各地で、金属・セルロイドなどの材料を用いて安価で大量生産のできる新しい度器が作られるに及んで、酒匂の竹ものさしも、独占の時代からきびしい競争の時代を迎えることとなった。

(3)みかん 小田原周辺の丘陵地帯が開けてくると、みかんの生産は東部の大磯丘陵では、前羽から国府津・田島・下曾我へ、西部の箱根山ろくでは、根府川・片浦から、大窪・萩窪・久野へと広がっていった。明治の中頃までは、紀州みかんと温州みかんが半々に栽培されていたが、大正・昭和になり、温州みかんの改良種が普及し

ていった。実が大きく、皮もなめらかで、甘味・酸味・香味ともによくなり、生産額も増加するようになった。初めは、みかんの仲買人に売っていたのが、その後、共同販売するようになった。

技術が改良された水産業 (1)定置網 ぶり・あじ・さば・かます・うずわ・きんめだい・いわしなど、小田原近海で獲れる魚の種類は多い。明治の初め頃まで、根拵網^{ねこさいあみ}が真鶴から早川沿岸によくかけられた。やがて、各地で発達したぶり漁法が、小田原でもとり入れられるようになり、「大敷網^{おおしきあみ}」という、魚をとる身網と誘導する垣網との組合せによる定置網が工夫され、大漁の日が続いた。大正時代には、「大謀網^{だいぼうあみ}」という大型のものがかけられ、朝夕網を閉めることで、漁獲高も増加していった。昭和の初めには「落とし網」が米神・真鶴漁場にかけられるようになった。これは、竹束などで作られた大きな浮きが数個ついていて、長く大きな垣網に誘われた魚群が箱網に引き入れられる能率的な網であった。

定置網が取り入れられると、漁獲高の増減も大きく、網の流失もあり、多額の資本が必要となったため、外部の事業家、資本家が経

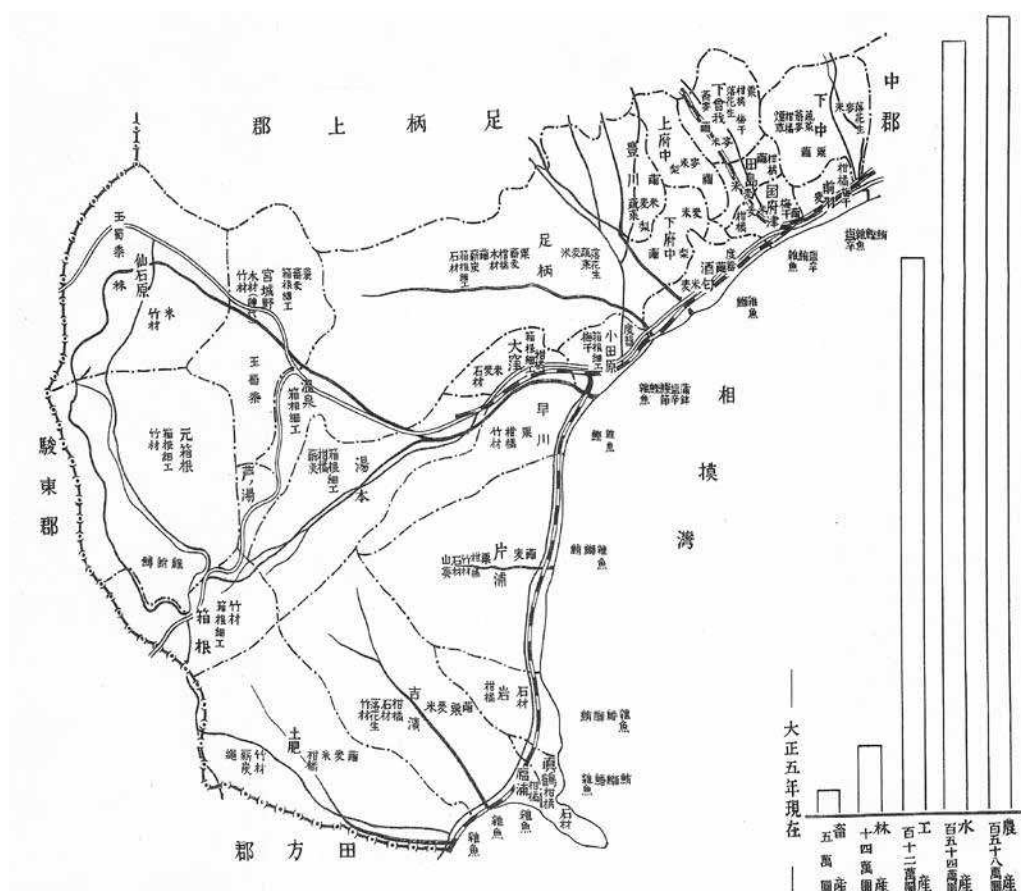


大謀網の模型

営する場合も出てきた。地元の人々の間で、漁業組合を作ったり、その他の団体や事業家へ賃貸しをしたりする仕組みも行なわれてきた。しかし、その権利や利益の配分などで近代的な仕組みができたのは、戦後になってからである。

(2)かまぼこ 今日のように長方形の板付が作られるようになったのは明治以降のことで、ゆで、あげ、やきぬきなど種類も多くなった。大正末期には販路は東京を中心として東日本に広がり、生産量も増加した。しかし、沿岸漁業の不振により、原料が不足し、朝鮮近海の「グチ」などが運ばれてくるようになると、材料高のため、そうざい料理からご馳走料理に代わっていった。生産の能率も上がるようになり、魚肉身取り器、肉ひき機、蒸気の蒸器などを使い始め、業者も次第に増加していった。

足柄下郡物産分布図（大正5年）（足柄上郡誌・足柄下郡史より）



明治・大正・昭和初期の主な工場

社名	所在地	設立年	目的	資本
小田原魚市場	小田原町	明治四十年	魚介類委託販売	二五〇万円
小田原倉庫運送	〃	大正一二年	運送倉庫業	五〇万円
杉田製材	〃	大正一一年	製材販売	一二万円
小田原紡織	足柄村	大正六年	製糸	六〇〇万円
日本加工織布	〃	大正八年	綿布防水布製造	一〇〇万円
小田原製紙	〃	大正五年	製紙	四〇万円
曾我殖産	下曾我村	大正一〇年	運送業	二二万円
吉浜製紙	吉浜村	大正六年	製紙	一〇万円
小田原ガス	足柄村	大正一〇年	ガス製造	一〇万円
日加工業	荻窪村	大正八年	ゴム加工織布	
富士フィルム	上郡南足柄	昭和八年	フィルム、映画紙	
〃	井細田	昭和一三年	レンズ、薬品	
小西六写真	堀之内	昭和八年	映画紙	
湯浅電池	多古	昭和一六年	蓄電池	

近代工業のおこり 明治の中頃より産業革命の波が各地に広がり、小田原もその影響で次第に近代的工場が建設されるようになった。一九一六年（大正五）小田原製紙会社が足柄地区に設立されたのを始めとして、酒匂川右岸地域に製綿、製紙、織物などの工場が次々と建設された。この地域は土地が広く、豊かな工業用水に恵まれ、交通の便が良いので、昭和に入ると、富士フィルム、湯浅電池、小西六などの写真、化学の工場が進出した。そして、一九四一年（昭和一六）に、酒匂に内閣省印刷局（現国立印刷局）の大工場が作られたことは、その後、酒匂川左岸の地域が近代的な工場地帯へ発展するきっかけとなったのである。

商業の発達 小田原は明治に入り、町勢が一時さびれたとはいえ、西湘の中心地として近郷の買物客を集めていた。当時の商店は、旧東海道沿いの本町・宮の前（本町）、旧甲州街道沿いの青物町・大工町・須藤町（栄町・浜町）に軒を並べていた。1889年（明治22）東海道本線が国府津から御殿場回りで開通すると、国府津が新興商店街として急速に発展するようになった。その後、国府津―湯本間の電車の運行などにより、本町・宮の前は引続き栄えたが、1920年（大正9）の国鉄小田原駅の開設は、小田原の商店街に大きな変化をもたらすことになるのである。大正末期から昭和にかけて、各私鉄が小田原へ乗り入れ、小田原は県西の交通の要地となり、駅に近い須藤町（銀座通り）が中心的商業地域として発展した。そして、この須藤町と駅を結ぶ錦通り商店街も開けていった。

小田原の商業は、古い伝統と堅実な商法により発展してきたが、交通の発達や産業の進歩に伴って各種商品の販路も広がり、発展の時代を迎えるのである。

5 明治の海しょうと関東大震災

明治の海しょう 1902年（明治35）に小田原は台風による海しょうの被害を受けた。9月4日の午後から海岸に大浪が打ち寄せ始め5日には、家屋の半潰10戸、全潰4戸、浸水100戸、負傷者数名の被害をもたらした。その後波浪はおさまったが、28日に至りまたも海しょうに襲われた。この日、朝からの雨は午前10時頃から小降りとなり、午後には晴れそうな空模様となったが、夜からの激しい浪は高さで振動を加える一方で、ついに午前11時には最大に達した。数mの高波は防波堤を超えて大地を揺がす振動と共に陸地に押し寄せて、人家を潰し、船を流し堤防、道路、田畑を破壊し、午後1時頃まで2時間にわたって暴威を振るう。当時の調査によると、被害状況は死亡12人、負傷184人、家屋の全壊144戸、半壊69戸、破壊550戸、流失293戸、床上浸水300戸、床下浸水700戸にも上っている。これは小田原町だけの数である。現在の小田原市の海岸線を考えると被害はもっと大きかったと思われる。

これより以前、小田原地方は1877年（明治10）7月、1880年（明治13）10月、1892年（明治25）9月、1899年（明治32）10月というように、しばしば高潮や高浪による災害を受けている。昔は海岸の幅が広がったようであるが、1703年（元禄16）の大地震で海岸に沈降があり、砂浜は狭くなった。江戸中期以後は堤防の修理と保護に手が回らず、特に幕末から維新にかけては動乱のため修理の余裕がなく、その上明治になっても年々の土用波に洗われ破壊が進んでいた。これらのことを考えると1902年（明治35）の海しょうによる大被害は、人災の要素を多分に持っていたともいえる。この海しょうの後、防波堤の建設が小田原町政の重要問題となった。そこで県の補助金をもとに町費および寄付金をもって堤防建設に着手した。1905年（明治38）4月に完成した堤防の全長は約2kmであった。その堤防も現在は海岸寄りに国道1号バイパス（西湘バイパス）が建設されたので、内側にわずかに名残をとどめるばかりとなってしまった。

関東大震災 1923年（大正12）9月1日、関東地方は大地震（大正関東地震）におそわれ、続いて大火災を起し、東京・横浜をはじめ各地に大きな災害をもたらした。



小田原駅前の惨状

余震が続き、火は燃えさかり、一瞬のうちに、阿鼻叫喚^{あびきょうかん}の巷^{ちまた}と化した。夜になっても火勢は衰えず、人々は寝る場所を一晩中探し求めた。なにしろ大地震と火災で通信は途絶え、新聞の発行も止まり、どこでなにが起っているのか少しもわからない状況であった。そのような中、社会主義者や朝鮮人が放火をしたり、暴動^{くわだ}を企てたりしているというデマも広がり、人々は不安を募^つらせた。どの町内でも「自警団」を組織し、竹槍などを持ち町内を守った。

当時の小学校の児童が、満1年たった1924年（大正13）9月1日に、1年間の思い出して書いた作文集から、1編をここに掲載しよう。

震災当時の感想 五ノ一 最上亀代子

『9月1日と聞いてさえぞっとする日悪魔にのろわれし9月1日の正后、大地はゆらゆらと振動しはじめました。始めに続いて大地はますますはげしくゆれ四方の家々はばたばたとたおれる。私の家のうらの人々もひめいを上げつつ逃げまどっている。一寸と見上げれば雲はどんよりとし太陽は赤く気味悪く光っている。四方の家々に起るひめい、続いてばたばたとあてもなく逃げまわる。私どもはすこしの物を持ち多くの人々にまじって逃げまわった。やっと安国寺の空地へ逃げのびた。あたりを見まわすと火の手はもう御幸座の前までおし寄せて来た。ほのおの町、人々は口々にわめき立てながら、ばたばたと逃げまどう、もまれながらやっと空地まで出た私は、またも心配におそわれなければならなかった。おそろしき旋風^{せんふう}は吹き立て、吹き立て、矢の如くあおり立てる、火花は散る、今は火の海の中に私どもはどうすることも出来ず、まごつくばかり炎^{えん}々^{えん}として燃え上るほのおは一軒一軒と用捨^{ようしや}なく勢にまかせ焼き倒す、時々パチパチという恐い火焰の迫り来る音、四辺の家の焼ける火気で暑くてたまらない、「あっ火が……火が」と多くの人々はまたもばらばらに散り始めた。私は「少し物でも」と思うと引きかえして自分のかばんを家の中からひきづり出そうとした。必死の力は恐いもので上の行李^{こくり}をのけ、やっと出して外へ出た。また御幸座から「ごーう」とすごい音を立て、立ちのぼった黒煙、たつまきがおそい、だんだんと広まって行く、悪魔^{ひと}ののろいのほのおは我が関東地方を一なめにしようとしているのだ、黒煙はますます猛烈においかぶさり大きな火の子は雨あられと降ってくる。空地に逃げのびた私

たちはほっと一安心していると恐しい旋風につれて火はだんだんと広がる。それをよけるため少しの物を草で払いながら休んでいると、間もなく夕方となりました。少しばかりの米をたきそれを、おむすびにして食べながら見ると火のため天地が真赤に染っている。震災後1年を去る今日になってもその時の事が、目にちらつくようです。』



根府川駅から転落した電車

当時のなまなましい状況がよくわかる。小田原町では建物はほとんど倒れ、火災が起り多数の死傷者を出した。当時、小田原町の人口は22,778人で死者は407人、負傷者は1,918人で、全戸数5,312戸のうち全壊1,740戸、半壊1,304戸、全焼2,268戸を数えている。また足柄村井細田（小田原市）の小田原紡績株式会社では、一度に工場建物が全壊したので作業中の社員と男女工員合せて134人が圧死し、重傷76人を出すという大惨事となった。

一方、地震に伴って起きた山津波によって片浦地区が受けた被害

も大きく、西方、^{ひじり}聖岳の一部で日陰と称する山の一角が地すべりを起し、土砂は白糸川の溪流を伝い根府川の集落を襲ったのである。被害は埋没戸数64戸、死者357名となった。ちょうどその時、熱海線根府川駅に入って来た小田原発真鶴行の列車も土砂のため、機関車1両を渚に^{なぎさ}残し他の6両は乗客約200名を乗せたまま海中に転落したのであった。このように、この大地震が小田原地方に与えた被害は言語に絶するものがあった。

6 よみがえる小田原

丹那トンネルの開通 かつて東海道の宿駅として栄えた小田原も、明治に入ると一時沈滞したが1887年（明治20）7月、新橋・国府津間に東海道線が開設されたことによって、町勢回復の刺激が与えられた。だが、小田原が名実共によみがえったのは、1934年（昭和9）丹那トンネルの開通によって東海道本線の主要駅として登場してからである。

小田原に初めて駅ができたのは、1920年（大正9）10月21日で熱海線が国府津・小田原間に開通した日である。この熱海線は将来丹那トンネル開通後は東海道本線に予定されていたもので、1922年（大正11）には早川・根府川・真鶴の3駅が同時に開設され、1924年（大正13）には湯河原駅、翌年3月25日には熱海駅が完成して熱海線全線が開通した。しかし、その先の箱根山の山腹をくりぬく丹那トンネルの工事が一大難工事であった。工事開始は1918年（大正7）4月1日からで、完成は1934年（昭和9）11月30日だった。当初の予定では工事期間7年であったが、実に16年間もの長期間にわたる難工事となってしまった。その原因は、極めて不安定な地質で無数ともいえる断層が横たわり、さらに大量の湧水などの悪条件によるものであった。丹那トンネルが開通したことにより、同年12月1日東海道本線は小田原を通ることになり、町民はこぞって盛大な祝賀を行なった。こうして小田原は再び日本の交通幹線上に復帰することになった。

小田原市の誕生 小田原駅の開設により駅前に商店街ができ、私鉄の乗り入れも行なわれた。1925年（大正14）には、小田原・関本間の大雄山線が開通、ついで1927年（昭和2）小田原

急行電鉄が、新宿より県北西の農村地帯を結んで開通し、1935年（昭和10）には箱根登山鉄道も小田原駅に乗り入れた。このことにより、小田原の商圈が拡大し、北は足柄上郡をはじめ秦野付近まで、西は静岡県熱海・伊東・御殿場におよび、東は平塚の商圈と二宮町あたりで接するようになった。とくに、足柄上郡の農村地域と箱根・湯河原の温泉地域の物資供給源としての位置を確立して、西湘地方の商業の中心都市としての性格が形成された。一方、箱根は、温泉と風光明媚な景観とが調和した観光地として多くの観光客が訪れるようになり、その玄関口としての小田原も大いに発展した。また工業の面においても近代工業が進出し始め、1933年（昭和8）富水に小西六写真工業が建設され、ついで1938年（昭和13）富士写真フイルム小田原工場が建設された。このように企業体もだんだんと集まり産業面でも活発化し始めた。小田原町当局は1931年（昭和6）に市制施行調査委員会を発足させ、市域の範囲、隣接町村の財政状態など、種々の調査検討を加え、かつ、各町村を訪問して打診を行なっている。その後、種々の問題があったが、1939年（昭和14）になると急速にその気運が高まってきた。その理由は、翌年は自治制発布50周年に当る年なので、国内を挙げてそれぞれ記念事業を計画している時期であったからである。小田原はこの記念事業に念願の市制施行を取り上げることに決定し、全町会議員を市制準備委員として小田原市誕生に乗り出したのである。そして1940年（昭和15）12月20日、足柄町・大窪村・早川村および酒匂村の一部山王原・網一色を合併して、面積57km²、人口54,699人となり、市制を施行した。神奈川県では横浜・川崎・横須賀・平塚について5番目で、初代市長に益田信世がなった。